
せいさんかけい！

石田梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

せいさんかっけい！

【Nコード】

N9958Y

【作者名】

石田梅

【あらすじ】

一直線上にない3つの点のそれぞれを結ぶ線分によってできあがる図形、三角形。

眼鏡の似合う知的な生徒会副会長・真と、どこかミステリアスで儂げな少女・雪緒、そして「眼力殺傷率120%」凶悪な風貌の誠一。『城山学園高等部・謎の3人組』の描く三角形は、くだらなくも輝かしい日常生活。

恋愛してるんだか青春してるんだか、はたまた何やってんだかわからない彼らの毎日を見守るお話です。

まるで少女漫画のヒロインのように、まっすぐに天真爛漫なお邪魔虫が登場します。

第1話 自己紹介を兼ねまして ある日の3人組

一直線上にない3つの点のそれぞれを結ぶ線分によってできあがる図形、三角形。

その中でも、各辺の長さが相等しく内角が60度であるものは正三角形、または等辺三角形と呼ばれている。

彼らはまさにその正三角形の体現者だ。

これは彼らのくだらない、だが本人たちにとっては至極大切で輝かしい日常。

冬の気配が近づいている。日が落ちる速度は日に日に増し、風にさらされるむき出しの首筋から寒気が走る。そろそろコートやマフラーの準備が必要だ。

その巡査は、いつも通り夜の町をパトロールしていた。

ぼつりぼつりと灯る街灯だけが頼りの道を、ゆつくりと自転車をこいで進んでいく。

田舎らしくシャッター街と化してしまっている商店街は、夜になると一層うす暗く人気がなくなる。こういう場所にこそ非行の芽は出てくるのだ。

とはいえ、ここ最近はやや平和そのもの。近隣高校は大人しい生徒ばかりなようで、聞いた問題といえは喫煙・飲酒くらいのものだ。当然禁止されるべき行為ではあるが、その程度でいきがっているよう

なら大きな問題を起こすこともないだろう。

今日という日もおだやかに終わるはずだ。

毎日同じ時間、同じように巡回していれば、どこをどう確認するかも習慣化してくる。巡査はいつものようにフイッとメインストリート脇の路地をのぞいた。そして彼はハッと目を見開いた。ゆるみきっていた神経が一気に張りつめられる。

華奢な体を押さえつける大柄な男のシルエット。その足元には頭を抱えてうずくまっている少年の姿も見える。

「き、君たち！　そこで何してる！」

巡査は前のめりになりつつ自転車を突っ込ませた。とんでもない、平和どころじゃない！　市民の平和は俺が守る！

そんな使命感にかられ、巡査は自転車を飛び降りると痛烈なライトの光を浴びせた。逃げる様子もない、3人はこちらを見て固まっている。それほど驚いたのだろう。

大柄な男は思った通りの目つきの鋭い悪人の風貌だった。襟元を掴まれていたのは少女で、大きな瞳が光っている。おそらく涙がライトに反射しているのだろう。かわいそうに、今すぐ助けるからな！　頭を抑えたまま顔をあげた少年の顔は眼鏡がずり落ちているものの利発そうだ。それを見て彼は一瞬で全てを理解した。

少女に下心を抱き、からむ男。それを止めようとした通りすがりの好青年だったが、暴力に訴えられてなすすべもなく倒れてしまう。あわや絶体絶命、少女の運命は……！　というところに、正義の味方が現れた！　俺だ！！

「今すぐ彼女を離しておとなしくしろ！」

すっかり自分に酔いしれた巡査が言い放ったとき、3人は予想外の反応を示してみせた。巡査を見て一斉に「しまった」という顔をしたのだ。

「あ……またか」

男は少女の襟首を持ったまま、小さくため息をついた。そこに反省の色はない。だが、少女はおびえもせず目の前の男にむかって文句を言った。

「もう、誠一さんのせいですからね」

「だからオレは言ったんだ、この場所はよくないって」

すつくと立ち上がった少年は、意外に上背もありしっかりとした身体つきをしていた。頭を押さえてうずくまっていたとは思えないほど元気そうだ。少年は眼鏡をかけなおしながら警官に向き直ると、2人を促して頭を下げた。

「すみません、御迷惑をおかけしました」

「わたしたちすぐ帰ります」

「……すみません」

ぺこり、と並ぶ姿は一種異様だ。

「え、なに？ なんなの？」

巡査は思わず1人1人に指をさしながら困惑して尋ねた。

「ねえ、君たちモメてたんじゃないの？」

「ええ、ですから俺たちは知り合いで」

「じゃれあつてただけです」

少年と少女が肩をすくめながら説明した。男にいたってはふてくされたようにそっぽを向いてしまっている。落ち着いて見てみると彼は大人の男というにはまだ幼い。体格が良いだけで年は他の2人と変わらないのだろう。だが、その話はあまりに疑わしい。

「え、えー。嘘だア。脅されてるだけじゃないの」

ちよつと信じられない、と言う巡査に、彼らは態度で証明してみせることにした。

少年が軽く男の肩に手を回したかと思うと、少女はぺとりと男の腹に抱きついてみせたのだ。それどころか左右から男の頬をつついている。男の眉間のシワは深くなるばかりだが、抵抗するつもりもないようだ。

「……幼馴染なんで」

男……というよりもう一人の少年は、不機嫌そうにダメ押しの一
言を言った。

次の日の昼休み、城山学園高等部の生徒指導室にて3人を前にし
た生徒指導教官・篠田は、うんざりといったため息を吐いた。

「またお前ら3人か。何度やったら気が済むんだ？」

「すみませんでした！」

眼鏡がずれるのもかまわず、勢いよく上体を45度に折つたのは
2年の宮田真。すらりとした体つきに

知的で繊細な容貌から女生徒の人気は高く、成績も優秀で生徒会副
会長を務めている。

「宮田、お前は生徒会にはいつているんだからしつかりしてもらわ
ないと困るぞ。それと有辺、お前もどうしてあんな時間にあんな場
所にいたんだ」

「すみません。毛糸を買いに行っていたんです。8時以降も開いて
いるお店は、商店街のほうにしかなかったもので」

有辺雪緒は細く小さな声で遠慮がちに答えた。伏し目がちの憂い
をたたえた瞳がミステリアスと評判の、儚さをたたえた1年生であ
る。

「毛糸？ なんだってそんなモン……」

そこまで言ったところで、篠田は上から降ってくる威圧感に気付
いた。困ったちゃん3人組の最後の1人だ。

ガタイの良さだけが取り柄の体育教師・篠田と並ぶ体格。身長で
は完全に篠田は負けていた。口角の下がった口元、眉間に浮かんだ
シワ、とがった鼻先。この世の全てが気に入らない、とばかりの表
情だ。白目部分の多い三白眼を向けられると、タールのようなぬぐ
い切れない重みが降ってくるような心地がする。入学式当日に上級
生から「生意気だ」と喧嘩を売られた際、高価買取して校門を真っ
赤に染め上げたことは今や伝説の一つとなっている。「眼力殺傷率

120%」と名高い坂上誠一、2年生。

篠田は思わず喉をならし、黙り込んでしまった。

そこへすかさず助け舟を出したのが真だ。

「先生、この度は申し訳ありませんでした！ もう二度とご迷惑はおかけしません」

「あ、ああ！ そうだな、うん！ わかったならいい、もう紛らわしい場所じゃれあうなよ！ も、戻ってよろしい！」

ビシィッと音がするくらいの動きで頭を下げる真に、篠田は慌てて言った。一刻もはやく誠一の視線から逃れたいとばかりだ。

「……すみませんでした」

地の底から湧きあがったような調子の誠一の謝罪は、もう篠田の耳に届いていない。

「失礼しました！」

学生の鑑のようなお辞儀をする真を横目で見ながら、雪緒は口元に小さな笑みを浮かべて言った。

「もう二度と、か。品行方正・成績優秀、信頼厚い副会長サマにとつては何度だつて使える手ですね。さすが真さん」

「ん？ 何を言ってる。こんな迷惑、そう何度もかけられないだろう」

まじめな顔をして首をかしげる真に、雪緒は肩をすくめた。

「何をいまさら。この手、今まで何度つかったことか……」

「やめとけ雪緒。このバカに皮肉は通じねーぞ」

「それもそうでした」

素直にうなずいた雪緒は、先に歩きだした誠一の後を追って廊下を歩きだした。

「おい、どういう意味だ。ちゃんと説明しろ、雪緒、誠一！」

3人連れだつて歩くだけで、周囲は一気に大きくざわめく。すれ違ふ生徒は壁にはりつき、遠くの生徒は指をさしてくる。

だがそんなこと、もう慣れっこだ。3人は生まれてからずっとこういう扱いを受けてきた。

真と雪緒の組み合わせではお似合いのカップルに見えるが、常にその2人にはさまれている誠一の存在は明らかに異質なものであった。幼稚園から今までにいたるまで、何度「誠一に脅されているのではないか」と尋ねられたかわからない。

そんな違和感の塊である3人組は、家3軒並んだお隣さん同士の幼馴染だ。それも生まれてこの方3人でいないことのほうが少ない、というくらいの仲である。

それでも王子様とお姫様と魔王がおてつないで仲良くしている図は、どうも世間一般に受け入れられないらしい。

人々は疑問に思う。なぜあの坂上誠一と一緒にいられるのか。坂上誠一はあの2人といえるのか。どう見たって合いそうにない、というか合うワケがない！ しかし。

真に何を言おうにも、眼鏡を光らせ「俺はアイツらがいないとダメだからな！」としか返さない。

雪緒に何を尋ねても、つかみどころのない笑みを浮かべながら「私はたぶん、あの人たちと離れられないと思うんです」としか答えない。

誠一にはそもそも声をかける勇気がでない。

そこで出た結論が触らぬ神になんとやら、「黙って見守るという名の放置」だ。

『城山学園謎の3人組』というそのまんまの異名までいただいてしまったが、そのおかげか今年雪緒が加わり3人組が再び結成されて迎えた初冬、ようやく落ち着いた毎日を過ごすことができていた。

周囲の人々はこの不可思議なトリオに興味を抱きつつも、誠一という大きな障害に阻まれて近寄ることができなかつた。だがしかし、

あともう少しだけ近寄ってみようと思っていたら、行動してみたら、すぐに気付いたことだろう。

真と雪緒はどうしたって誠一から離れないし、離れられない、ということに。

3人は削られた昼休みでさっさと昼食をとるべく、いつものように4階の階段通路に移動した。ここはいつでも陽があたってポカポカするうえに、人がめったにこないのだ。

「しかし、昨日は参ったな」

真は焼そばパンを片手にホットコーヒーをすすりながらしみじみと言った。眼鏡の曇りは気にならないようだ。

「まっただよ、冬一さん」

それにつながるの野菜ジュースを飲む雪緒だ。二人の非難の目線は誠一に向けられていた。

重箱並のサイズの弁当箱を並べていた誠一は、ジロリと雪緒を見据える。

「俺のせいだよ」

「だって、誠一さんが真さんの頭叩いて私の胸倉つかむから勘違いされたんじゃない」

「んだとお？」

雪緒の小さな頭を驚塚むと、誠一は眉間にシワをよせ口元をゆがませた凶悪な顔つきになって言った。

「おめーらがワガママ言うのが悪いんだろっが！ 雪緒はいきなり手袋にボンボンつけるって言うし、真は出来上がったばかりのマフラーに穴開けやがって！ だからあんな時間に毛糸買いに行ったんだろっが！」

「だって去年誠一さんが作ってくれたマフラーにはボンボンついてた。アレかわいかったんだもん」

頭をがしがしとかき回されながら主張する雪緒。さらさらのシヨ
ートヘアが乱れに乱れてしまっている。

「しかたないだろ、気づいたらカバンの金具にひっかかってたんだ。
それより俺はお前の顔が問題だと思うぞ。目つきとか」

そう言いつつ誠一の弁当に手を伸ばす真に、誠一の眉間のシワは
深まるばかりだ。当然、その手が届くまえにたたき落とす。すると
それを見た雪緒は、今度は誠一の援護にまわった。

「ひどい、真さん。誠一さんはちよつと眉間のシワが深くて目元が
鋭いだけ」

「……雪緒、お前そんなモンで野菜とつた気になってんじゃねーぞ。
オラ、食え」

そう言つて差し出された彩り豊か、栄養満点の弁当箱に雪緒は素
直に飛びついた。

「わーい！！ サトイモの味噌煮食べたーい！！」

「何！？ ずるいぞ雪緒！ 誠一、俺にも弁当わけろ！」

「てめえはその炭水化物のコラボで十分だ！」

「ウグイス豆おいしいーい」

「雪緒、添え物ばかり食ってないで、ちゃんと飯を食え。おにぎ
りちゃんと中身コンブにしてやったから」

「誠一、お前雪緒にはっかり甘すぎじゃないか？ 俺の卵焼きはど
うした」

「うるせえ、知るか！ そこにあんだろ！」

怒鳴りながらおにぎりを手渡し、卵焼きを突きだし、誠一はいっ
もながら忙しい。そのうちに誠一の肩に雪緒が寄りかかってきた。

「お腹いっぱい。眠くなってきた」

「寝てんじゃねーぞ、雪緒。食うだけ食っていつもボーっとしやが
つて……」

雪緒はミスティアスではない。ただのボンヤリ少女だ。

「あ、真さんのボタン飛んでった」

「ん？」

「ん？じゃねえよ！ 無理やり引っ張ったらボタンもとれるわ、何やってんだバカ野郎！」

「いや、袖をめくろうと思ってな」

「なんでボタンをはずすって発想がねーんだよ、お前の脳ミソは！」

成績優秀・品行方正な生徒の鑑である真は、勉強はできても常識的なことに多少問題がある。

「まったく、お前らは……。真、ボタン取ってこい！」

誠一は眉間のシワをより深くしながらソーイングセットを取りだした。恐喝・強盗・殺人など思いつく犯罪は一通りこなしていそうな顔をした、お母さん級の世話焼き苦勞性。誠一はベツタリとまわりつく幼馴染たちを長年面倒みてきたのである。

甘やかされた真と雪緒が今更誠一から離れるはずはない。

そして誠一も、目を離れたすきに何をやらかすかわからない二人が心配でたまらず、離れることができないでいる。

本当のことを知っているのは彼ら自身とそれぞれの両親くらいのものだ。

これは、そんな3人組を見守るお話である。

第1話 自己紹介を兼ねまして ある日の3人組（後書き）

まずは3人の紹介を兼ねたお話から。

これから彼らの描く奇妙な正三角形を、ともに見守っていただけると嬉しいです。

ご意見・感想をお待ちしています。

一言でもいただけると、本当に胸がいっぱいになるんです。よろしく願います。

第2話 ある朝の3人組

冬の空は薄い青だ。

天気はいいが、まだ空気があたたまっていない。朝の7時を過ぎて、閑静な住宅街はようやく動き出そうとしていた。

せまい土地を最大限に利用しようと考えられた造りの家は、三つ子のように三軒ちよこんと並んでいた。そのうちの二軒から出てきた真は、ぴんぱーん、と隣の家のチャイムを鳴らし、返事が聞こえる前にさらに隣の家の前に移動した。またチャイムを鳴らす。

これが真の朝の日課だ。

「おはよう、誠一！」

「……おう」

のっそりと出てきたのは誠一だ。眠りの浅い誠一にとって、朝日は天敵だ。目元の筋肉がひきつり、凶悪な顔がより凄みを増していた。

「相変わらずのひどい顔だな！」

「うるせえよ、お前は相変わらずムカつくほどイイ笑顔だな」

「当たり前だ、早寝早起きは基本だからな」

嫌味も通じず胸をはる真に、誠一は重い頭が余計に重くなるのを感じた。思わずうなだれたとき、誠一のわき腹に何かがトスンとぶつかった。

「お、はようございまプス ……」

眠りは深いが何時間でも眠っていたい雪緒だ。なんとか玄関を出てきたのはいいが、誠一にぶつかったまま寝息を立て始めた。その目は完全に閉じられている。

「おはよう。起きろ、雪緒。朝食は食べたか」

真の問いかけにも答えない。

雪緒の首根っこをつかんで立たせながら、誠一は髪の毛を整えてやった。やわらかく癖のない雪緒の髪は、手櫛ですいてやるだけで素直にまとまる。

「ん……………」

雪緒が右手に持っていたゼリー飲料を真に見せると、のろのろとした動きでそれを自分の口にあてがった。

「いい加減ブドウ味飽きた……………」

「ゼリーではなく米を食べればいいだろう」

まさに正論であるが、真の言葉に雪緒は首を横に振る。

「食べる時間があるなら寝ていたい……………」

雪緒のいぎたなさは筋がね入りだ。雪緒の部屋には目覚まし時計3個が常備されているが、雪緒を完全に目覚めさせることはできずにいる。

「まったく、しかたないヤツだな」

真は苦笑を洩らすと、雪緒の左腕をとった。誠一はもの言いたげな視線を真に向けるが、何も言わずに雪緒の右腕を同じようにつかむ。そしてそのまま雪緒をずるとひきずって道を歩き出した。

小柄な雪緒が背の高い2人に連れて行かれる様は、まさに「宇宙人捕獲絵図」である。

だが、近所の奥様方や犬の散歩をしているご老人方から不審な目で見られることはない。

これも毎朝の風景の一部となっていたからだ。

「相変わらず起きないな、雪緒」

真は感心したように言った。そして眼鏡を光らせながら少しだけ上にある誠一の顔を見た。それに気付き、誠一は口元をひくつかせる。

「誠一、俺は思ったんだが」

「言つな。聞きたくない」

「朝、俺がコイツをランニングに誘つのはどうだろう」
「やめろ」

真の提案を、誠一は間髪いれずたたき落とした。

「なんでだ！ 健康にもいいし、雪緒は朝食をしっかりと食べられる。いいじゃないか」

「……お前、朝何時に起きて何キロ走ってる？」

「4時に起きて15キロ走っている」

「付き合えるか！」

勉強もできるスポーツも得意な真は、校内では文武両道を地で行っているように評価されている。しかし真実は、己を鍛えるといふことに妄執ともいえる情熱をそそいでいる体力バカだ。

「そうか？ 雪緒も案外体力があるから、少しずつ慣らせば……」

「慣れる前に倒れるぞ」

「それは困るな」

真はしぶしぶと言った様子で引き下がった。だが、またすぐに立ち直る。

「なら、こういうのはどうだろう」

「お前のアイディアは何一つ聞きたくねえんだよ！」

「雪緒は正攻法では起きないことは証明済みだ。なら、起こすことではなく運搬法を考えよう」

真の耳は器用に誠一の訴えをスルーする。真は雪緒の腰をがっしりとつかむと、犬猫を扱うかの如くひよいと持ち上げ、肩に担いだ。

「こうやって運ぶというのは」

「ぶっ……」

雪緒の顔面が勢いよく真の背中にぶつかる。

「ん？」

「鼻つぶれんだろ！ せめて抱っこか背負うかにしろ！ っていうか運搬って言うな！」

誠一はあわてて考えなしの幼馴染から雪緒を取り返す。

「甘やかしすぎるのはどうかと思うが」

「てめえのは虐待なんだよ！」

悲しいことであるが、やはりコイツは頭のネジが何本かぶっ飛んでいる。誠一はそう思わずにはいられない。

「ん、ん」

「お、効果があったじゃないか。雪緒が起きたぞ、誠一」

「さっきのは運搬手段つってただろうがっ。おい雪緒、平気か」

さすがの騒ぎに雪緒はむずがって声を上げた。誠一は真に変わり、雪緒をあやすようにゆすりながら胸に抱いてやる。

小さな鼻先が少しだけ赤くなっているような気がするのは、やはり顔面に受けた衝撃のせいか。こんなんでも一応女の子、と誠一が青くなっていると、雪緒はまっげを震わせてまぶたを開けた。

「……………うるさくて眠れないんですけど……………」

「……………」

誠一は無言で雪緒を下ろすと、右手で雪緒の首根っこをひつつかみ、左手で真の頭蓋を握りしめながら歩き出した。

「あ、ちよ、誠一さん？ 私起きました、起きましたよー」

「ぐああああ、待て、誠一！ これは痛い、かなり痛いぞ！」

「もついい。お前らに付き合ってたらいっつまで経っても学校につかねー。このまま行く」

誠一は宣言通り、城山学園高等部の校門をくぐるまで2人から手を離さなかった。真と雪緒の悲鳴がBGMだ。

毎朝こんなことをやっているから『謎の3人組』扱いされていることに、本人たちは気づいているのかいないのか。

第2話 ある朝の3人組（後書き）

第2話を読んでいただき、ありがとうございます！

3人組はいかがでしょうか？

淡々と過ごしながら変化を迎える彼らを、どうか見守ってやってください。

ご意見・感想をお待ちしています！

第3話 ある午後の人組

伏せたまつげが物憂げな影をつくり、青白いともいえる肌とあいまって無機質な印象を与えている。熱の感じられない表情が、それを余計に増長させていた。

だがぼてりと赤い唇が、彼女が人形でない証となつて奇妙な色香をかもしだしていた。一部の乱れもなく城山学園高等部の女子制服に身を包んだその立ち姿は、愛しい者に手折られるのを待つ可憐で儂い一輪のスイセンのようである。触れると消える儂い幻のような、それでも手をのばさずにはいられないような、淡い存在。

雪緒がかわいらしいのは周知の事実だ。真も誠一も、とつくの昔から知っている。

だが、淡い幻どころか濃すぎる実態を持っていることも2人はよく知っていた。

「しまったな、こんなに混むとは思わなかった」

真は両手に持ったドリンクカップをしっかりと持ち直した。右は自分のホットコーヒー、左は雪緒の紅茶。どちらも人にぶつかってこぼしたら大惨事になる。

「平日だったのに、ヒマなもんだ」

「俺らも似たようなもんだろうが」

自分用のコーヒーとバケツサイズのポップコーンカップを持った誠一は、宇宙船の内部のような光の飛び交う薄暗い映画館のロビーを見渡した。

チケット売り場と売店前は長い行列ができています。そこからようやく抜け出した2人は、ほっと一息ついたところであった。

定例職員会議のため午前中だけで授業が終わった城山学園高等学校の学生たちは、一斉に街へ飛び出した。

普段は何もせずならだらと過ごすことが多い3人であるが、出無精代表のような雪緒が珍しく「見たい映画がある」と言い出したのだ。それならば、と電車で数駅離れた街へ繰り出してみれば、平日の昼間にも関わらず映画館は人でにぎわっていた。

飲み物を買に行っただけなのに、思いのほか時間をとられてしまった。

「雪緒、じれて動き回って迷子になっていないだろうか」

「不吉なこと言っただけじゃねーよ」

雪緒は女子の平均身長からみても小柄だ。人並み以上に体格の良い誠一からすれば、つぶれても仕方のないサイズに見える。何も考えていない真の発言とはわかっていながら、誠一は心配になってきた。

「おとなしくしてるとは言っておいてが……」

迷子を心配する母親の如く、誠一は雪緒を探す。そして言いつけ通り、映画予告が流れる大型テレビ画面の横に立つ雪緒の姿を見つけてホッと胸をなでおろした。

だが、誠一はその隣にいる余計なものまで見てしまった。

見知らぬ若い男が雪緒の手をつかんでいるのだ。そしてそれをからかうように見ている男が3人。

雪緒はいつもと変わらぬ冷めた顔で、目元一つ、口元一つ動かさない。これでは本気で嫌がっているとは伝わりにくいだろう。だが、内心かなり苛立っていることが誠一にはよくわかる。ふりほどこうと細い腕を左右に振っているが、男はにやけた笑みを浮かべながらなおも雪緒に話しかけていた。男同士で来ていたところ、1人たらずむ雪緒に目をつけたのだろう。

通り過ぎる人々が多いが、誰も助けようとはしない。

「あの野郎……」

誠一は静かに怒りを吐き出した。

「雪緒！」

真もようやく事態に気づいたらしく、眼鏡の奥の瞳を険しくさせる。

それを確認した誠一は、真に「行くぞ」とアイコンタクトを取ろうとした。両手の荷物を放り投げ、ダッシュついでに飛び蹴りでも食らわせりやあの命知らずも退散するだろう。誠一は手に持っているのが熱々のコーヒーとぶちまけると大変面倒なポップコーンであることも忘れた。

だが、しかし。真は誠一の視線に気づきながらもそれを無視した。そしてあるうことが、

「外側に立って手を引け！」
と叫んだのだ。

こいつ何言つてやがる、本気で頭おかしくなったか？ と誠一が思ったその瞬間だ。

雪緒は八つと顔をこちらに向けると、すぐさま行動に移した。流れるように鮮やかな動きだった。相手の左手によって右手首をつかまれていた雪緒は、男の体の外に向かつて一歩踏み出し体を反転させた。その体制をとることで男は手首を返される形になり、力が入らなくなるのだ。そして雪緒はするりと手を引き抜くと、そのまま男のわき腹に裏拳を叩きつける。ぐえっと顔をひきつらせて体を半分に折ったところを、雪緒は手のひらで押し上げるように相手の顎を下から突いた。

男がひっくりかえる瞬間が、まるでスローモーションのように見える。

雪緒は哀れな敗者を冷え冷えとした目で見下ろした。

「よおっし、よくやったぞ……！」

「何やってんだお前はアあああ……！！！」

カップを持ったままガッツポーズをつくる真をしり目に、誠一はポップコーンをまきちらしながら突進した。小さな飲み口からコーヒーがこぼれ手を濡らす、熱さなど感じていられない。その勢いに、他の客たちは一斉に飛びのいて誠一の道を作る。

「おいコラ雪緒！ お前今何やった！！」

「あ、誠一さん。お帰りなさい」

「おう、待たせて悪かった……じゃねえっつもの！」

誠一が作った人波の切れ目を悠々と歩いてきた真は、誠一の怒鳴り声を無視して晴れやかな笑みを浮かべた。

「雪緒、さっきの良かったぞ！ 練習した甲斐があったな」

「あんなのどこで使うのかと思ったら、案外役に立ったね」

ぐつと親指を立て会う2人を、誠一は苦々しい思いで睨みつける。

「てめーだな、真！？ 雪緒に妙なことを教えたのは！」

「妙なことじゃない、ちよつとした護身術だ」

真は何を言ってるんだお前は、という目で誠一を見た。

話にならん、こいつは何にもわかつちやいない！ 先ほど自分は飛び蹴りをしようとしたことなどすっかり棚にあげ、誠一は幼馴染2人の奇行に首を横に振った。

「あ、あんたらなア、その女の子とどういう関係かしらないが、いっついなんなんだ！？ 非常識にもほどが……！！」

ようやくシヨックから回復したのか、わき腹を抑えながら男は顔を上げながら抗議してくる。固まっていた仲間の3人も彼に続いて向かってこようとしたが、その威勢の良さも長くは続かない。

それもそのはずだ。言いようもない怒りにかられ、薄暗い照明の下でにぶく光る誠一の目に射抜かれたのだから。

「……………お、お連れさまにたいへん失礼しました……………」

「……………わかりやいいんだよ」

それだけ言っさつさと退散した男たちを背中を送り、誠一は少しだけ力サの減ったポップコーンを雪緒に渡す。

「雪緒、いつあんなの習ったんだよ」

「この前俺が教えた。いざというとき身を守ることくらいできたほうがいい」

真が満足げに鼻をならした。最近真の部屋によく雪緒が出入りすると思つたら、案の定ろくでもないことをしていたらしい。誠一は自分の監視が甘かったことを若干後悔した。

だが、と誠一は自分の腹あたりにある雪緒を見下ろした。

さつそくポップコーンをほおばる今の雪緒は普段よりずいぶんと幼く、危なげに見える。普段は近寄りがたい雰囲気をしているくせに、妙な連中を引き付けやすい少女であることは事実だ。真の言うとおり、身を守る術を心得ている分にはかまわない。だが、誠一の予想斜め上を走ってくれるのがこの幼馴染だ。

「だからってフィニッシュまではいらねーだろ、真オー!!」

「雪緒、手は痛くないか？」

「平気」

「聞け!」

お前らしい加減に怒るぞ、と誠一が怒鳴りつけようとしたとき、2人は示し合わせたかのようにそろって口に指をあて「しーっ!」と言った。そしてわざとらしく周囲を見回す。

「うるさくしちゃうと迷惑になるよ、誠一さん」

「そろそろ時間だ。3番シアターだったな、行くぞ誠一」

「お前らなア……」

この騒ぎで今更「静かにしろ」も何もない。この場の視線は全て3人に注がれている。にぎやかだった空間にぽっかりとした穴があき、今ではこちらを指さしながらのひそひそ声ばかりが聞こえてくる。

「はい、誠一さん」

ギリギリと歯ぎしりをする誠一の口元に、雪緒は細い指先をあてがった。ポップコーンがつままれている。

「……」

それを無言で口で受け取ると、雪緒は口角をほんの少し上げるだけの笑みを浮かべて見せた。それは雪緒にとっては満面の笑みに等しい。表情筋のあまり発達していないと思われる小さな顔であるが、内面の喜怒哀楽は激しい。

雪緒はこれから見る映画にはしゃいでいる。真もそれをわかっている。

誠一はキャラメルのフレーバーがついたポップコーンを苛立ちとともに飲み込み、雪緒の背中を押しつつ真の後に続いたのだった。

第3話 ある午後の3人組（後書き）

だらだらと変わり映えのない日々をおくる3人ですが、次回から少しずつ変化が訪れます。
どうぞお付き合いください。

ご意見・感想をお待ちしています！

第4話 生徒会室での3人組

「大変だね！　こんな仕事、放課後にやらなくちゃいけないなんて……」

やわらかい響きの女の子の声。少し震えているのがかわいらしい。しかし、それに答える男の声はなんとも無愛想である。

「たいした作業ではない。それぞれの書類に署名して生徒会印を押すだけだからな」

「あの……手伝おうか？」

「この仕事は生徒会の人間しかやってはいけないことになっている。君は違うだろう」

「そっか、ごめん……。でも、書類を分けたりとか渡すとかできるし！　効率あがるよ？」

「今やっているのが俺が一番やりやすい方法だから、余計なことはしなくていい」

「そ、そっか……。ごめんなさい」

女の子はしゅんとしおれたように黙り込み、猛烈なスピードで紙の束をめくる音だけが聞こえてきた。

「真さんってバカですね」

「真はバカだな」

雪緒と誠一は、給湯室の扉のそばにうずくまって耳をコップに押し当てていた。そんなことをしなくても十分に隣の会話は聞こえるのだが、これは気分を出すための小道具だ。扉をはさんだ隣の部屋は生徒会室であるが、今そこは生徒会副会長である真と、彼と同学

年らしい女生徒の2人きり。

人気のない生徒会室は、対真用の定番の告白スポットである。常識こそないが根は真面目な真は、誰もやりたがらない事務作業を一手に引き受け、時折こうして1人で居残っている。そのときこそ、真に想いを伝える絶好の機会なのだそうだ。

「真さん、顔は綺麗だから」

「成績はトップクラス、運動神経も抜群だしな」

こそこそと耳打ちしあいながら、2人はやれやれと肩をすくめた。

生徒会室には隣接して給湯室があり、そこにはちよつとしたお茶菓子和飲み物が常備されている。3人組の数少ない理解者の1人である城山学園の女傑・生徒会長の二本松清香は、真の仕事に対する報酬として空いている時間に限り生徒会室を開放してくれていた。

今日も真をからかいつつも2人でティータイムを楽しもうとしていたのだが、予期せぬお客様が訪れたというわけだ。「宮田くん、ちよつといいかな？」という控えめなノックを合図に給湯室に隠れることにはもう慣れた。

今まで幾度となく同じシチュエーションで、取り付く島もない真に撃沈していった女生徒達を目に（正確には耳だが）してきた。これでまた真なんか泣かされる女性が増えるのか、と雪緒は嘆かすにはいられない。

しかし座って紅茶を飲みたいのではやく諦めてくれないか、とも思ってしまうのが正直なところである。

「あの野郎がとんでもないバカだったことにどうして気付かねーんだか」

「パツと見ただけじゃ伝わらないんだね」

真は鼻筋の通った優しい顔立ちをしている。線が細い割に筋肉質な体格はボクサーのそれにも似て、腹が割れているというのが本人の自慢である。勉強も毎日の予習復習は学生として当然のこと、と真顔で言っただけのける。

見た目はまさに眼鏡をかけた王子様だ。

だが中身は王子には程遠く、真面目も行き過ぎれば短所にしかないことを証明してしまっている悲しい男だ。

彼女たちが何のためにわざわざ用もない生徒会室に訪れているのかいい加減わかってほしいが、真にはまったく通じていない。だから「俺たちがいることは絶対に言わない」と毎回言い含めなくてはいけなかった。これだけ鈍感な男、どこがいいのだろうか。

誠一と雪緒はため息をつきそうになったが、気を取り直したような女の子の

「じゃあ、お茶でも淹れてあげる！」

という華やいだ声にビクリと体がはねた。

せまい給湯室だ、流しの下に雪緒は隠れられても、誠一が入るようなスペースがあるはずはない。窓から飛び降りようにもここは3階だ。

どこへ身を隠そう、とあわてる2人を安心させるかのように、落ち着いた真の声が響いた。

「いや、結構だ。それより申し訳ないが、君の左隣にある棚から青いファイルをとってもらえないか」

「うん、わかった！」

頼まれたことがよほど嬉しかったのか、女の子がパタパタと足取り軽く動く気配が伝わってくる。

真にしてはうまいアドリブだ、と雪緒はほっと息をついた。窓のサンに足をかけていた誠一もこそこそと戻ってくる。

「あ、これ花山先生の字だね」

「そうだな」

「花山先生って字は汚いけど、生物の授業わかりやすくてももしろいよね」

「ああ、俺もそう思う。この前の人体については特に……」

急に話がはずんだ扉の向こう側に、今度は呆れではなく驚きで2人は顔を見合わせた。

「すごい。真さんが楽しそう」

「まア、アレは筋肉の話題だからかもしれないが……」

話の内容はイマイチだが、チヨイスはまさに真好みだといえる。思わぬ真の好反応に、誠一と雪緒はコップを放りだして直接扉に耳をあてた。

「ふふ、そういえば飯田先生も字は特徴的だよー」

「言ってるな。俺もノートをとるのに苦労する」

「えー、宮田君が!? でもすっごくキレイで見やすいノートだって評判だよ?」

「そうだろうか」

「うん、今度テスト前に見せてもらおうかな」

しおれかけたところで水を与えられた花は、再び咲きほころんだ。色恋というのは複雑であるが、他人のを見ているとこれほど滑稽なものはない、と誠一は舌打ちしたい気持ちになった。

雪緒は誠一とは違い、立ち直りの早さに素直に感心している。

「ねえ、誠一さん。恋する女の子って強いね」

「ああ。あれだけの会話であそこまではしゃぐんだからな」

とはいえ、実際真に対してこれだけ会話が続いた例はマレである。今までにないことが起きるかもしれない、と野次馬根性が騒ぎだしてきた。

だが、しかし。

「教わっている教師が同じなようだ。君はこのクラスだ?」

「……あたし、宮田君と同じクラスだけど」

春のようにぼわぼわと温かかった空気が、一瞬で凍りつく。

「あ、すまない、目に入っていなかったようで……」

「もういい。あたし、帰るね」

冷え切った声音がしたかと思うと、いくらか経たぬうちにピシャン!と大きな音を立てて扉が閉められた。

「なんだっただ、一体。おい、誠一、雪緒。なんだかわからんが彼女はもう帰った。出てきて平気だぞ」

給湯室の扉を開けて2人を呼ぶ真の顔には、罪悪感も後悔も反省も、なにもない。

「……………」

「……………」

誠一と雪緒は、今度こそ大きなため息をついた。

「やっぱり真さんって」

「バカだな……………」

「な、なんだいきなりお前ら！」

第4話 生徒会室での3人組 (後書き)

ご意見・感想をお待ちしています。

第5話 帰り道の3人組

さむいさむい、と身をすくめながらも、放課後の解放感に生徒たちは浮かれながら校門を出ていく。そんな中、注目を集めながら歩いてくる雪緒と真の姿があった。

雪緒と真は2人で帰宅の途についていた。誠一は用事がある、と足先に先に帰ってしまったのだ。強面の誠一が抜けると2人はまさに美男美女の組み合わせ、いつもとは違った意味で人目を引くのである。

「うっ、寒い……。なんだって女子高生はナマ足という苦行に耐えなければならぬのか」

「なんで耐える必要があるんだ。女子制服の規定ではタイツとかあるだろう」

「そももいかないのが女子高生の悲しいサダメ」

「腹巻はいいのにか」

「ボディウォーマーって言って。おなかは見えないからいいの」

「女子高生というのはわからんな……」

高校生らしからぬ落ち着きをもって真剣な顔をして話しこんでいる2人だが、内容はいつも中身の無いものばかりだ。雪緒は誠一お手製の真っ白なマフラーで口元まで覆い、ふるっと体をふるわせた。「うっ……」

「できれば俺のズボンをはかせてやりたいが……」

「絶対やめてください」

「当たり前だ。俺も路上で下半身パンツのみになる気はない」

雪緒は大真面目な真をじっとりと睨みつけた。正気を疑う発言だが、真ならば冗談になりかねないから怖いのだ。

「だが、寒いなら我慢するんじゃない。風邪をひくと誠一が怒るぞ」
そう諭され、雪緒の脳裏に強面の顔をよりすさまじいものにした
がら怒る誠一の姿がうかんだ。きつとたまご粥を作るための菜箸を
片手に「体調管理もできねーのか！」と怒鳴ることだろう。

「気をつけようつと……。あ、ところでなんで今日は誠一さんいな
いの？」

「誠一なら、呼び出しを受けたようだ」

「ああ……」

雪緒は目を伏せ、手袋（これも誠一お手製である）の毛糸のボン
ボンをいじった。その仕草を見て、真は雪緒の頭を自分の胸元に引
きよせた。

驚くべきことではあるが、この地域ではいまだに「 高校の×
×ってヤツが強いらしいぞ」「負けてらんねえ、アイサツしに行っ
てやろうぜ」という会話が成立している。城山学園は比較のおとな
しい学校ではあるが、その分誠一の実力は際立ってしまった。
おかげで時折、他の高校の柄の悪い連中から「呼び出し」を受けて
しまうのだ。

「大丈夫だ。あいつは負けない」

「それでも、万が一ってことがあるでしょ」

「その万が一のために俺がいるんだ」

「終わってからしか行かないくせに」

「俺が行くのはあいつが負けないようにするためじゃない。あいつ
の敵討のためだ」

「負けるの待ってるワケ？」

「負けない。だから俺の出番はない」

「意味わかんない」

まったく顔色を変えないが、雪緒がへそを曲げたことをすぐさま
察知した真は苦笑いを浮かべた。

「雪緒。そうすねるな。誠一がまた困るぞ」

「すねてないよ」

「嘘をつけ。俺にはすぐわかるぞ」

真は深緑色の手袋をした手で雪緒のほほをくすぐった。

「そろそろ終わっただろう。お土産を買って、迎えに行こう」

「……うん」

誠一はポリバケツの上に置いておいたカバンとコートを取り上げた。隣の怪しげな店の通気口から流れる臭いが移ってしまっていないかが気がかりだった。

吐く息は白いものの、暴れたおかげで体は熱い。誠一はうめき声をあげて地面に這いつくばっている少年たちを一瞥し、その場をあとにした。鼻筋を狙って鼻血を出させるだけで、大抵の連中の戦意は喪失する。今回も同じで、ここに倒れている人数よりも逃げて行った人数のほうが多かった。

案外早く終わったな、と誠一は首の骨を鳴らした。怪我はない。悲しいことにケンカダゴができた右拳は、多少の衝撃では痛みも感じない。

夜にこそ華やぐ店が並ぶ裏通りのパーキングエリア。狭いうえに両側からのしかかるように生えたビルのおかげで日が当たらない。昼間に通りがかる人間はほとんどいないし、城山学園からも適度に離れている。誠一は「呼び出し」に応える際にはいつも必ずこの場所を指名した。

細い道を大股で歩き、大通りに一步踏み出したところで誠一は足をとめた。

幼馴染2人が並んで立っていたからだ。しかも、片方は大きな瞳に不満の色をにじませている。

「よう。今回もあっさり終わったみたいだな」

「……おう」

誠一は軽くうなずくが、あっさり終わるのはここまでだな、と心の中で嘆息した。拳で片付く問題のなんと簡単なことか！

「誠一さん」

「なんだよ」

誠一は雪緒と視線を合わせない。

「肉まん。まだ温かいよ」

「……おう」

誠一は瞠目しながら、雪緒が差し出した紙袋を受け取った。開けたとたんに湯気がたちのぼり、なんとも食欲をそそる香りが鼻をくすぐった。

「雪緒。俺にもくれ。食べながら帰ろう」

真が雪緒の背中を押す。そして誠一に向け、どうだと言わんばかりの得意げな笑みを向けてきた。

誠一はけつと口元をゆがめる。

誠一が丁寧に「呼び出し」に応えるのは、校門前で待ち伏せされるのが嫌だからだ。高くもない評判をさらに落とすことになるし、一方的に殴られるのも我慢できない。だったら素直に迎え撃ったほうが楽というものだ。

それに、と誠一は隣で自分の顔ほどもある肉まんをほおばる雪緒を見下ろした。

誠一には、何よりも守らなくてはいけないものがある。うかつに学園近くでからまれて、むざむざとソレを危険にさらすことはできなかった。そして自分がその場を離れても、ソレのそばには信頼できる男がついている。だからこそ誠一は安心してあの場所で「呼び出し」を受けるのだ。

いつしか減るだろうと思っていた「呼び出し」の回数が一向に減らないことが誤算であったが、そんなことはもういい。諦めた。

毎回毎回誠一を悩ませるのは、別のことだったのだが。

今回は真がうまくやってくれたようだな。

誠一は内心ほっとしながら肉まんの最後のひとかけらを飲み込ん

だ。

そんな誠一の心を見透かしたようなタイミングで、雪緒はすかさず「誠一さん、なんか脂っぽい変なニオイがするー」

と露骨にそっぽを向いて見せた。ご機嫌は完全にはなおっていないらしい。

「……悪かったな」

雪緒は肉まんから顔を離し、じっと誠一を見つめた。

「あとで全身消臭スプレーかけてあげる」

「そりゃどーも」

真は肉まんの湯気でくもった眼鏡を拭きながら、素直ではない？人の幼馴染を見守っていた。

第5話 帰り道の3人組（後書き）

今回は新たな登場人物が加わり、お話が動いていく予定です。

ご意見・感想をおまちしています。

第6話 3人組と乱入者

絶妙なバランスを保っていた正三角形。

それをいまさら打ち崩そうとする人間が入り込むとは、雪緒にも真にも誠一にも、思いもつかないことだった。

「季節外れではあるが、ご両親の都合で急ぎよ転入してきた大橋愛梨さんだ」

「大橋愛梨です、よろしくお願いします！ 仲良くしてください！」

クラス中の注目を受け、彼女は満面の笑みを浮かべてポニーテールを揺らした。

「なんだか少女マンガの主人公のようだ、と雪緒は思った。」

「空いている席に座りなさい」
「はい！」

大きな目はきらきらと輝き、細い手足はバネ仕掛けのように跳ねながら動く。愛梨は担任教師が指さした席、つまり雪緒の隣へとまっすぐに向かってきた。

「よろしく！ 仲良くしてね」

愛梨は茶目つけたつぶりに言った。堂々としたものだ、と雪緒は感心してしまう。

「よろしく」

雪緒が返事をする、と、愛梨はきよとんと首をかしげた。

「具合悪いの？ 大丈夫？」

「……元気だけど」

いきなり何を言うのか、と雪緒まで首をかしげると、愛梨はにっこりと笑った。

「よかった！ 表情が暗いから病気かと思って心配しちゃった！」

「……そう」

仲良くなれないかも。雪緒は心の中でこっそりつぶやいた。

「ユツキーって呼んでいい？ 雪緒ちゃんもいいけど、もっと砕けたカンジがほしいし。あ、あたしは愛梨でいいよ！」

「ねえ、トイレ一緒に行こうよ！」

「ユツキーまた顔暗くなってるよー、もう！」

愛梨に悪気はない。彼女は心からの好意をもって雪緒と仲良くしようとしていた。転校先で最初に話した相手なら、そうするのは至極当然といえる。雪緒もそれは理解していた。

それでも、なぜ自分は彼女を素直に受け入れる気になれないのか。

「大橋さん、私のことは有辺でいいよ」

「トイレなら教室を出て右に行けば、階段そばにあるよ」

「この顔はもともとだから」

雪緒のあまりに無愛想な返答に、教室中はひやひやしなながら、しかし多大なる好奇心をもって2人を見守っていた。

雪緒はもともとこの1 Aでは浮いていた。謎の3人組の1人ということもあるが、整いすぎて温度を感じさせない容貌がそれに拍車をかけていた。クラスメートと交流を持たないわけではないが、雪緒はいつもある程度の距離を置いた付き合いしかしていない。いや、許さないといったほうがいいかもしれない。

今年度の1 Aが成立してからすでに9カ月がたとうとしている。だから多くのクラスメートたちは雪緒との付き合い方も慣れてきたところではあるが、愛梨のようにいきなりズカズカと踏み込んでいった人間はいなかった。さて、雪緒はどうなのか。そして愛梨はどう反応するのか。

愛梨がバツサリと斬られることは予想済みだったが、ギャラリーの期待に応えるように、彼女はきよとんと大きな目をさらに大きく丸くした後でまた笑った。パツと太陽のように明るい笑顔だ。

「ユツキーってクールだね。顔も声もすっごくかわいいのに、中身はかっこいいんだー！ うらやましいな！」

おお、とひそやかにざわめく教室。これには雪緒のほうも驚いた。この子、全然めげない。

「ねえユツキー、お昼いつもどうしてるの？ 一緒に食べよー！」

しかし、この愛梨の発言にはさすがに教室が凍りついた。雪緒が真や誠一と昼食を共にしていることは周知の事実だったからだ。転校初日に誠一のような人間と顔を合わせるのは強烈すぎる。

「ごめんね、私、いつも一緒に食べている人たちがいるから」

雪緒はやんわりと言うが、愛梨は雪緒の手をぎゅっと握って離さない。触れられた箇所から鳥肌が立ちそうだった。

「あたしも入れてもらえないかなー、なんて？」

こてん、と小首をかしげて上目づかいに雪緒を見る愛梨。愛梨は格別美少女とは言えないが、小動物じみた愛きようがあった。口角がきゅつと上がった口元が愛らしい。見るものを引き付け、おねだりを聞いてあげたくなるような魅力だ。

これが庇護欲というものか、と雪緒は冷静に愛梨を観察した。

「ねえ大橋さん、わたしたちと食べようよ」

「うん、有辺さんはこの通り、静かなのが好きな人だからさ」

思わぬところで救いの手。

興味は尽きないが雪緒が困っているとみて、クラスの女子が助け舟を出してくれた。雪緒が感謝の視線を向けると、彼女たちは恥ずかしげに頬を染めて雪緒に笑いかける。

妙なところでほのかな友情を感じた雪緒だったが、愛梨は一筋縄でいく相手ではなかった。

「えー？ なにそれ、変だよ！ なんだかそう言って距離置いてるほうがさみしいって」

愛梨は驚いたように目をぱちぱちとまたたかせる。

「いや、校内にはちよつと危ない人とかもいるからさ……」
その危ない人のもとへ行こうとしている雪緒は、誰にもわからない苦笑いをもらす。

「危ない人？ 会ってみないとわかんないよ。大丈夫、大丈夫！」
忠告もむなしく、愛梨は雪緒の手をぎゅっと握り直すと、もう片方の手で弁当を掲げて見せた。

「ね、ユツキー行こ？」
「……………」

雪緒のほんのりとあたたまった心が急速に冷えていく。

4階の階段そばは冬場は寒い。最近は空き教室にもぐりこんで弁当を広げている。

先に来ていた真と誠一は、ぽかんと口を開けて愛梨を見つめた。

「こんにちは、今日転入してきた大橋愛梨です！ お邪魔します」
「そういうコトです」

雪緒はもうどうとでもなれ、と愛梨を真と誠一に任せることにした。

「わアー、センパイ、ですか？」

制服の襟元についた学年を示すバッジを見て、愛梨は尋ねた。臆した様子もなく愛梨は2人に歩み寄る。

真もどうしていいのかわからないようで、雪緒と愛梨を交互に見ては戸惑っていた。誠一に至っては何も言わず、弁当を並べている。一種の現実逃避だ。

今までこの3人の集まりに他人を入れたことはなかった。たいていの人間は誠一に恐れをなして近寄ってこないからだ。

誠一がだんまりを決め込んだことを察した真は、とりあえず、と口を開いた。

「あ、あ、そうだ。2年の宮田真」

「よろしくお願ひします！」

「ああ」

それだけ言うと、真は素早くそっぽを向いてしまう。

愛梨は頬を赤く染め、小さく雪緒に「すっごくかっこいいセンパイだね!」と耳打ちした。素直でわかりやすい子だ、と雪緒は思う。さてもう1人はどうするか、と雪緒が誠一をうかがっていた横で、愛梨は朗らかに声をかけた。

「あの、そちらのセンパイのお名前は?」

「あア?」

無視していた存在にまさか話しかけられるとは思っていなかったらしい誠一は、思い切り顔をしかめてみせた。怒っているわけではない、驚いているのだ。

「お伺いしてもいいですか」

にこつと誠一に笑いかける愛梨に、真と雪緒は目をむいた。

誠一の、あの顔を見て。

ひるむでもなく、おびえるでもなく。

笑いかけるなど。

「あ、ああ……。2年の坂上だ」

「坂上センパイ! よろしくお願ひしますね。わ、すっごい豪華なお弁当! センパイのお母さんが作ったんですか!?!」

「……俺だ」

愛梨はわあ!と歓声をあげて重箱をのぞきこむ。

「すごーい! お料理上手なんですネ。あたし全然ダメだ! うらやましいなア、ユッキーいつもこんなおいしいそうなお弁当食べてるの!?!?」

「ゆ、ゆっきー!?!?」

「あ、ユッキーって呼んでるんです。ね!」

そう言って雪緒を振り返る愛梨は、寒空にはあまりに不釣り合いだった。

「うっそ、愛梨ちゃん、あのサカガミセイイチとご飯食べたの!？」
「うん！ すっごく優しい人だったよ！ ご飯もおいしかったし。
へへ、ちよつと分けてもらっちゃんだ。宮田センパイはかつ
こいいし、ユッキーはかわいいし、なんだか豪華なお昼休みだった」
放課後、他の生徒と楽しげに話しこむ愛梨の姿は、雪緒よりもよ
っぽどクラスに溶け込んでいた。

明るくて前向き、ちよつとおしゃべり。素直で、元気がよくて、
人を色眼鏡で見ずに自分で見極めようとする。

自分に自信がある証拠だ。

雪緒にはとてもマネできない、春の太陽に似た笑顔。

雪緒は戦慄した。

そして同時に、大橋愛梨を絶対に許してはいけない敵と認識した。

雪緒にとって、何よりも完璧であった正三角形に訪れた変化を自
覚した瞬間だった。

第6話 3人組と乱入者（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

第7話 ある日の真と雪緒

購買のパンと誠一の弁当で腹を満たした後は、眠りたがる雪緒の相手をして食休み。それが真の昼休みの過ごし方だった。

しかしある日を境に、昼休みは最も落ち着かない時間になってしまった。

「宮田センパイって生徒会の副会長だったんですね！　すごいなあ、頭もいいし、運動神経も抜群だって聞きましたよ！」

「あ、ああ……、ありがとうございます」

真は珍しく言葉につかえながら、なんとか礼だけ言った。しかし、だからなんだというのだ、という思いがこみ上げて口元がゆがみそうになる。

大橋愛梨という少女は、雪緒のクラスに転入してきた女生徒だ。

最初は「お邪魔します」と雪緒の後について来たのだが、今では雪緒を引つ張ってくる勢いだ。愛梨は物おじしない性格らしく、ぐいぐいと突っ込んで自分の居場所を確保していく。無邪気な満面の笑みは、拒絶や嫌悪といったあらゆる負の感情を跳ね返すばかりでなく、避けようとしたとたんこちらに罪悪感をもたらす。ある意味で最強無敵だ。

おかげで、真はまったく落ち着かない昼休みを過ごすこととなっていた。

「宮田センパイって何かスポーツやってるんですか？」

「いや。体を鍛えることは好きだが」

「おおー。見た目細いのに、実は筋肉がっしりって感じですよもんね」

愛梨はおどけて細い腕で力コブを作ってみせた。

「こういうところだ、と真は豚バラのキャベツ巻きを口に放り込むことでごまかした。」

愛梨は人をよく見る。何を好んでいるか、何を嫌っているか、そういうものを見透かしたように相手の心に入ってこようとするのだ。

「ユツキー、どうしたの？ あ、このほうれん草の胡麻和え、甘くておいしいよ！ さすが坂上センパイだねー」

「ありがとう」

雪緒は、愛梨が差し出した誠一の弁当から素直にほうれん草をつまんだ。だがそんな態度とは裏腹に、雪緒からは冷え切った空気しか流れてこない。愛梨も気づいているからこそいろいろと気を遣っているのだろうが、効果はない。愛梨は困ったように笑っただけだ。そして次、とばかりに愛梨は誠一のほうへ向きなおった。

「坂上センパイ、このキャベツのってどうやって作るんですか？」

「あ？ これは、キャベツをまず茹でてだな……」

「一タマ？」

「どんだけ食う気だ、バカ。一枚ずつはがすんだよ。この弁当の量だと8枚くらいだ」

誠一は得意分野の料理について珍しく饒舌に語っている。眉間のシワがうすくなっているのは気のせいではないだろう。愛梨はうんうん、と身乗り出して話を聞いていた。真の位置からは、体の大きな誠一が小柄な愛梨を受け止めているように見えた。

隣の雪緒が発する冷気が一層冷えたのを感じ取り、真はやれやれとため息をつく。愛梨が来るようになってから雪緒はすこぶる機嫌が悪い。

「雪緒」

「とんとん、と肩をつつき、振り向いた雪緒の口に卵焼きを突っ込んだ。」

「しっぴかり食べる」

「……」

も「も」と咀嚼しながら、雪緒は真の目をじっとりと見返した。

「わ、もしかして、宮田センパイとユツキーって付き合ってるの！？」

愛梨のはしゃいだ高い声が室内に響く。

「何？」

「違うけど」

聞き返す真を無視し、雪緒は口の中のもの飲み込んで返答した。

「え、違うのー？ お似合いだと思ったのに。ね、坂上センパイ？」
今まで何度となく言われたことだが、本人たちを前にして、誠一を前にしてここまでハッキリと言ったのけた人はいなかった。

残念そうな愛梨の背後にいる、誠一の目を真は見た。いつもどおりの重みと凄みのある視線だ。真は目をそらさずに言った。

「彼女のわけない」

そう、雪緒が俺の彼女のはずはない。

真は自分でハッキリと言いながら、心の中で確認作業を行っていた。俺と雪緒は幼馴染であって、恋人のように男女として関わったことはない。

雪緒はそもそも、そういった恋愛事に興味をもっているのだろうか。雪緒は自分と誠一以外の他人には通じない無表情を維持しており、まともな友好関係が作れているのか、ということにすら真は疑問を抱いている。

雪緒のことは愛しいと思う。誠一にさえ言ったことはないが、雪緒の微笑みにドキリとさせられたことは一度や二度ではない。

だが、雪緒は真の恋人ではない。

雪緒が誠一の恋人でないのと同じように。

雪緒は今日もタンクトップにジャージという、気の抜け切った格好で真の部屋に訪れていた。親ぐるみで気心の知れた仲であるから、家に来るのも顔パスだ。

「いいなあ、コレ。私も買おうかな」

と以前そう言いながらパンチボールで遊んでした雪緒に、「俺のを貸してやるからいつでも来い」と言ったのは真だ。

今日もいい音を立てながら遊ぶ雪緒を、真はベッドに座りながら眺めていた。基本的に後悔というものを知らない真であるが、今回ばかりは軽々しく雪緒を自室に入れることを許可したことを悔やんでいた。

拳を出すのと戻すスピードが同じ、軌道もブレがない。理想的なフォームだ。ボクシング部に入っていないのが本当にもつたいない逸材。だがやはり体が開きがちになるのは教える自分が我流のせいだからだろうか。そういつた冷静な分析を行いながらも、真は頭の一部分が少し熱をもっていることに気づいていた。

軽いフットワークでしなやかに動く体。首筋を伝う一筋の汗。普段は真つ白な、少し色づいたほほ。下唇がぼてりと赤い、口元からもれる乱れた呼吸。

真が男だとわかつているのかいないのか、雪緒は無防備に軽装で来る。運動するのだから当然と言えば当然。しかしそれにしても警戒心がなさすぎる。

これを信頼と呼ぶか、なめられているのか。

誠一も最初はとめていたが、今では呆れながらの黙認状態だ。しかしどうしてももっと強く止めてくれなかったのか、とお角違いな恨みを抱かずにはいられない。8畳の部屋は十分広かったというのに、なぜ今になってこども狭く感じるのか。

もし今。

俺がこいつに触れたとしたら。

雪緒はどっ思っだろう。

誠一は？

「は」

急にこちらを見た雪緒に、真は思考停止におちいった。

「真さん、何にも思わないの」

「何がだ」

体が震えそうになるのをなんとかこらえる。

「誠一さんのこと！」

なんとというタイミングで誠一の名前を出すのか、こいつは。

真はこめかみに銃口をつきつけられたような気持ちになった。

「大橋愛梨さんをどうにかしないと、誠一さんが取られる」

雪緒は乱れた呼吸を整えながら、吐き捨てるように言った。

「大橋さんみたいな人は危険だよ」

「危険？」

「今まではあんな風に誠一さんに接する人はいなかった」

雪緒はグローブをはずし、いらだたしげに真にむかって投げた。

「誠一さんはもともと世話焼き体質。ああいった子は気にせずには
いられないはず。自分におびえたりしないってわかったらなおさら
だ。 そうしたら！」

「そうしたら？」

「誠一さん、私たちじゃなくてあの子ばかりかまうようになるよ。
大橋さんのための手袋、大橋さんのためのお弁当、大橋さんのため
のあれやこれや……」

「そうだろうか」

真は必死な様子の雪緒に首をかしげてみせた。今までどんなに迷
惑をかけても離れなかった誠一だ。今更大橋愛梨が出てきたところ
で、自分たちの関係がどうにかなるとは思えなかった。

「真さんはノンキなんだから。よく考えてよ。誠一さんにベツタリ
で面倒みてもらうことに慣れきった私と真さんと。笑顔炸裂でちよ

つと天然っぽくてまっすぐでイイ子の大橋さん！ 大橋さんは絶対『ありがとう、誠一さん！ 優しくて頼もしくってかっこよくて最高！ 大好き！』みたいなこと平気で言ってるよ！ どっち可愛がるかって言ったら私たちは完全敗北です！ 知ってるでしょう、誠一さんは恐竜怪獣よりも犬猫、犬猫よりもリスやハムスターが好きなんです！」

雪緒は悲愴な顔をして言った。

誠一が自分たちから離れる？ いつもの風景がふつと真の脳裏をよぎる。そこからぽっかりと自分と並ぶ人影が一つ消えるなんて。

「……そいつは困るな」

真は小さく首を横に振った。

「ちよつと視察が必要だ。俺は今から誠一のところへ行ってくる」

「ようやくわかってくれたんだね」

雪緒は鋭い眼差しをいくらかやわらげつつなずいた。

「いつてらっしゃい。私、もう少し遊んでいい？」

「ああ、好きに使え。水分補給を忘れずに」

真はそそくさと部屋を出ると、扉をしめてから大きく息を吐き出した。

『ありがとう、誠一さん！ 優しくて頼もしくってかっこよくて最高！ 大好き！』

真は扉を背にしてずるずるとしゃがみこんだ。耳の中でさきほどの雪緒の妙なモノマネが響き渡っている。

「……よからぬことは考えるべきではないな」

どうにか平静を取り戻そうと、誠一の家へ行く前に15分ほどラッピングをすることにした。

このままでは、誠一の顔も雪緒の顔もまともに見れそうにない。

それは前から知っていた変化に、真が初めて向き合ってみた瞬間のことだった。

第7話 ある日の真と雪緒（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

第8話 その日の誠一と真

誠一は、医者かカウンセラーのどちらを呼ぶべきか、と真剣に悩んでいた。

なんだってこの幼馴染は、冬空の下で汗だくになって我が家の玄関先で息を切らしているのだろう。

「せ、誠一……、は、は、は……」

「お前は変態か。それとも迷子か。ここは俺んちだ」

「知っている……は、は」

真はフーッと大きく息をつくとき、シャツの袖で額をぬぐった。

「話があるんだが、その前にシャワーかしてくれ」

「自分の使えばいいだろうが」

「雪緒がいる」

雪緒の名前を出されては引き下がるしかない。一応コイツにも恥じらいというものがあつたのか、としぶしぶと真を家へ上げた。

湯気をたてている真を風呂場につっこむと、誠一は台所へ戻る。

明日の弁当の仕込みをしている最中だったのだ。誠一はじゃがいもを皮をむきながら、真がここへ来た理由について考えていた。

予想は付いている。

最近どうにも機嫌が悪い雪緒のことだ。

そしてなぜ機嫌が悪いかも、なんとなくわかつている。

誠一は雪緒に対してどんな思いを抱いたらいいのか測りかねていた。

嬉しい？ 照れくさい？

しかし、誠一の目元は緩むどころか陰しさを増した。

『宮田センパイとユツキーって付き合ってるの!?!』

『お似合いだと思ったのに』

やはり、これは後悔？

いずれにしても前々からわかっていたことだ。向き合う時が訪れた、ということなのだろう。誠一は静かに包丁を置いて、重箱を棚に仕舞い込んだ。じゃがいもは明日何かに使うことにしよう。

整然とはしているもののトレーニング機器が場所をとっている真の部屋に比べ、誠一の部屋は机と本棚以外にモノがなく殺風景だ。本棚にはまばらにしか本がなく、持ち主の嗜好はうかがえない。

真は迷うことなく椅子に向かい、ベッドに腰を下ろした誠一を見下ろした。勝手知ったるなんとやら、真は誠一のジャージを借りて我が物顔で部屋に居座っている。

「率直に言っぞ」

「ああ」

真はきっぱりと言った。雪緒には「偵察」と言ったが、そんな回りくどいマネは真にはできない。

「あの1年女子、どうするつもりなんだ」

「……どうするって」

予想通りの質問に、誠一は笑いをこらえるのに苦労した。どうせ真は1年女子の名前すらよく覚えていないに違いない。勉強はできる男だが、必要がないと思ったことに対してはとことん無頓着だ。大橋愛梨は完全に真の中でいらぬ人間と選別されている。

雪緒はそれをわかっている。

「お前がとられやしないかと、雪緒が不安がっている。ここ最近ずっと機嫌が悪いことは気づいてるだろう」

「そうか」

「そうか、じゃない。ハッキリした態度を見せてもらわないと、俺も困る」

真は誠一の煮え切らない答えが気に入らない、とばかりに眉をひそめてみせた。答えなんて決まっているだろう。そんな声が聞こえてきそうだ。自信に満ちて揺らがぬ真のその態度。

それが、誠一の心に大きな波をたてた。

「うるせえな」

「何？」

「なんでイチイチお前にんなこと言わなきゃいけないんだよ」

誠一は怪訝な顔をする真に問いかけた。地の底からはい出してきたような声音である。

「お前らはそうやってなんでもかんでも自分たちの言うとおりにさせてーのか。いい加減うつつとうしいんだよ」

「誠一」

「毎度毎度ソレだ。誠一、セイイチ。俺はお前らの保護者でもなんでもねー」

誠一はこれ見よがしに大きなため息をついた。

「そもそも今までがおかしかったんだ。なんとか我慢して付き合ってたやってたが、人の色恋沙汰にまで口つつこむようなら終わりだな。お前らの束縛ももうこりこりだ」

「色恋？ そんなモノにするつもりなのか、お前」

誠一の発言でも何よりそのことに驚いた、と言わんばかりの真の反応にいささか拍子抜けしながら、誠一は続けた。

「いいか、真。俺はもうお前と雪緒には干渉しねえ。お前らもそうしろ。幼馴染とも思うな。2人で好き勝手やってろ。俺に二度と面倒かけるなよ」

話は終わりだ、と誠一はベッドに横たわって手を払った。出ていけ、のサインだ。

しかし真は出ていかない。

「誠一」

「なんだよ」

「お前、あの1年女子とどうするんだ」

真はもう一度ゆっくりと誠一に尋ねた。誠一は寝転がったままジツトリと真を睨む。相手が真でなかったら、恐怖にひきつりながら逃げていくであろう眼光だ。

「お前らには関係ない。雪緒にもそう言っとけ」
「ふむ」

眼鏡をかけなおし、真はまじまじと誠一を見据えた。憤りや困惑、あせり、怒り。誠一の予想に反して、真の目からそういった激情はまったくのぞけなかった。「何を言ってるんだ誠一、正気に戻れ！」とつかみかかってくることを想定していた誠一は、落ち着いている真に逆に不安を覚える。

「いいだろう。しばらく放っておいてやる」

「はア？」

「俺も思うところがあったからな」

あまりに傲岸な物言いに、誠一は本気で額に青筋をたてた。

何考えてんだ、コイツ。どこまで上から目線なんだ。

真は立ちあがって先ほど脱いだ自分の服をつかむと、素直に部屋を出る。そしてドアを閉める前に振りむいて言った。

「誠一、俺は予言する」

「……ンだよ」

真の眼鏡は蛍光灯の光を反射して白く光った。

「お前は今以上に後悔する」

真の静謐な声が、せまい部屋の中でゆっくりと広がっていった。それはまるで誠一に死を宣告する死神のような音だった。

第8話 その日の誠一と真（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9958y/>

せいさんかけい！

2011年12月15日02時51分発行